



バッハの森通信

第 132 号
2016 年
7 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9 <http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699 e-mail : info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

新しい命に生きる

喜びの歌

1. 聖(キ)キリストは、
ハレルヤ、ハレルヤ、
よみがえりたもう。
ハレルヤ、ハレルヤ。
2. よみがえりなくば、
ハレルヤ、ハレルヤ、
世は消え去れるも、
ハレルヤ、ハレルヤ。
3. よみがえりたれば、
ハレルヤ、ハレルヤ、
主を誉め称えよ。
ハレルヤ、ハレルヤ。

先日、バッハの森で開いたレクチャーコンサート「復活祭の音楽」で、この歌を参加者全員で歌いました。14～15 世紀以来、春祭りの復活劇、舞踏歌として民衆が愛唱した歌です。この後に、状況を説明する福音史家、イエスの亡骸に油を塗るため墓を訪れた 3 人の聖女、彼女たちにイエスの復活を伝えた 2 人の天使などがそれぞれ歌う 19 節の歌詞が続きます。私たちも登場人物を分担して歌い、そこに参加者全員の「ハレルヤ、ハレルヤ」の斉唱が入って大いに盛り上がりました。

* * *

日本では余り注目されていませんが、キリスト教文化圏では、復活祭はクリスマスと並ぶ大祭です。本来、人間は農業をなりわいとし、自然界のサイクルに合わせて生きていました。そこで農作業の日程表として暦が考え出され、各季節の節目に祭りを祝いました。春分の次の満月後の最初の日曜日に定められている復活祭も、春祭りに他なりません。

厳しい冬が過ぎて野山に新緑が映える春は、新しい命の季節です。当然、春祭りで人々は、新しい命の輝きを喜び楽しみましたが、この新しい命が別の命の犠牲によって生み出されたことも忘れませんでした。復活祭に歌われてきた数々の歌は、犠牲になった命によって、自分たちが、今、新しい命を生きている喜びをテーマにしています。この事情を、聖書時代から継承された伝承に基づいてルターが作詞したコラールが語ります。

キリストは死の縄目につき
私たちの罪のために渡された。
彼は再びよみがえり
私たちに命をもたらした。
そのことを私たちは楽しもう。
神を誉め称え、彼に感謝し、
ハレルヤと歌おう。ハレルヤ。

自分の命を犠牲にして新しい命を生かす営みは、自然界の摂理です。ですから、人間も自然界の生物として、両親は自分の命を削って子どもを生み育てます。ところが、人間はより複雑な社会を創り出したため、他人の命を犠牲にして自分だけが生き残る弱肉強食の生き方を追求するようになりました。このような生き方を“罪”と呼び、その行き着く先は“死”に他ならないことを、ナザレのイエスは自分の命を犠牲にして知らせた、と彼の弟子たちが悟りました。これがキリスト教の始まりです。

* * *

反乱扇動の濡れ衣を着せられたイエスが逮捕されると逃げ散った弟子たちは、彼が十字架で処刑された後は迫害を恐れて隠れていました。ところが、女弟子たちが、埋葬 3 日後に行ってみるとイエスの墓は空だった、と最古の伝承が伝えます。このとき実際に何があったのか、客観的史料がないのでよく分かりませんが、「恐ろしくなり墓から逃げ出した彼女たちは誰にも何も言わなかった」という結びは、事実を伝えていると思います。このとき彼女たちはイエスが復活したとは思っていません。“復活”は「復活したイエスと出会った」者の証言であって、“客観的事実”ではないからです。あるエピソードは、復活したイエスと出会った者たちの「心が燃えた」と伝えます。逃げ隠れていた弟子たちが、イエスの死の意味を悟り、彼の教えを公然と語り出したのは、復活したイエスと出会い、(この出会いは「聖霊を受けた」と表現されました)、新しい命、新しい生き方で生きるようになったからです。

「よみがえりなくば、世は消え去れるも」と歌った人々は、復活したキリストとの出会いがなければ、今の自分は存在しないと自覚していたのです。間違いなく、バッハの音楽は、復活したキリストと出会った喜びを歌っています。皆さん、新しい命に生きる喜びの歌を、と一緒に歌いませんか。(石田友雄)

復活祭の音楽

「過越の犠牲に称賛を」“Victimae paschali laudes”

この歌の作詞者、ブルグントのヴィポ（Wipo von Burgund）は、11世紀前半に神聖ローマ皇帝に仕えた宮廷詩人でしたが、旋律は民謡に由来します。復活祭第1祝日のミサのための「続唱」として、民衆に広く愛唱され歌い継がれました。次のような内容の歌詞です。

第1連：過越の犠牲、キリストを讃美せよ。

第2～3連：小羊は犠牲となって罪人を神と和解させた。命（＝小羊）は死と戦って殺されたが、生きて支配する。

第4～5連：「(マグダラの) マリアよ、お前は何を見たか?」「私は主の復活を見た」。

第6連：ユダヤ人の不信仰を非難（後に削除）。

第7連：復活したキリストに信仰を告白して憐れみを祈願する。

「主、よみがえる」“Christ ist erstanden”

各節の終わりに、「キリエ・エレイソン」（主よ、憐れみたまえ）のドイツ語なまり「キリエライス」がつく会衆歌を、「ライゼ」（Leise）と呼びます。この歌は、12世紀から15世紀にかけて、ドイツ語圏各地で愛唱された代表的ライゼです。第1、2節と第3節の間に、復活物語に基づく歌詞が何節も、各地方で自由に追加挿入されました。「この歌は他のすべての歌に勝る歌だ」と、ルターは言います。続唱「過越しの犠牲に称賛を」の旋律によって歌い出します。

「聖きキリストは」“Erstanden ist der heilig Christ”

“Surrexit Christus hodie”「今日、キリストは復活された」のドイツ語訳です。14世紀～15世紀以来、春祭りの復活劇、舞踏歌として愛唱されました。第1～3節の歌詞は「主、よみがえる」によります。

「主は死の縄目に」“Christ lag in Todes Banden”

「主、よみがえる」を、ルターが改訂作詞したコーラルです。詩文内容と旋律を続唱「過越の犠牲に称賛を」から継承します。バッハはコーラルの全節と旋律により、復活祭第1祝日のためのカンタータ(BWV 4)を作曲しました。このコーラルは、第4節を中心とする対称形をしています。

第1節：全主題：キリストの死、復活、喜び。

第2節：死の支配。

第3節：キリスト（命）に支配権を奪われて死は形骸を残すのみ。

第4節：死と命の戦い。命の死によって死が命に呑み込まれた。

第5節：十字架の上で愛の火で焼かれた復活祭の小羊（命）の血により死は無力になった。

第6節：主（小羊）が太陽になり夜が消え失せた。復活祭を祝おう。命の支配。

第7節：酵母を除いた復活祭のパン、キリストを食べて健やかに生きよう。

民族の始まりを祝う過越祭

エジプト人の奴隷だった古代イスラエル人の先祖は、モーセに率いられてエジプトを脱出したとき、神の命令に従い、家族ごとに小羊を屠り、その肉を焼いて食べ、その血を入り口の柱と鴨居に塗りました。その夜、全エジプトの家々を死神が訪れたとき、入り口に小羊の血が塗ってある家だけは過ぎ越しました。この故事を民族の始まりを祝う過越祭と定め、古いパン種（酵母）を取り除いて新しいパン種に代える除酵祭とともに、毎年、春分の次の満月の晩にユダヤ人は守ってきました。ナザレのイエスがエルサレムで12弟子とともに祝った「最後の晩餐」も、過越祭・除酵祭の正餐です。

晩餐后、ゲッセマネの園でイエスが逮捕されると、弟子たちは彼を見捨てて逃げ散ってしまいました。イエスは裁判で死刑の判決を受け、ゴルゴタで十字架にかけられ、処刑されました。彼の遺体は墓に葬られましたが、3日後の早朝、マグダラのマリアたち3人の女弟子が、彼の遺体に油を塗るため墓を訪れると、墓は空になっており、天使からイエスが復活したことを知らされたこと、福音書は伝えます。

復活したイエスに出会う経験

イエスの復活は、死人が息を吹き返した、というような単純な奇跡物語ではありません。福音書のいささか錯綜している伝承を整理すると、いろいろな場所で一人で或いは仲間と一緒に“復活したイエスに出会った”という“個人的な経験”をした弟子たちが、それまで迫害を恐れて隠れていた隠れ家から公の場に出て来て、ナザレのイエスこそキリスト（メシア）であると語り出したのです。それは、生前のイエスの教えと行動の本当の意味が突然分かり、イエスの死は、過越の小羊のように、人に命を与えるための死だったという彼らの説明になりました。このような弟子たちの“復活”から、キリスト教は始まったのです。

過越祭を原語ヘブライ語で「ペサハ」と言います。ギリシャ語とラテン語は、これを訛って「パスカ」と言いますが、同時に「パスカ」によって復活祭も意味します。従って、「パスカ」が過越祭なのか復活祭なのかは、文脈によって解釈しなければなりません。ところが、ルターは歴史的には「過越の小羊」とすべきところを、「復活祭の小羊」（Osterlamm）、「過越の種入れぬパン」を「復活祭のパン」（Osterfladen）と訳しました。（勿論、バッハはルター訳の聖書を用いていました）。紀元前13世紀の歴史的な出来事を記念して選民イスラエルの始まりを祝う過越祭が、イエス・キリストの復活によって選民イスラエルの後継者、キリスト教会の始まりを祝う復活祭に代わったという彼の信仰を示しています。

続唱「過越の犠牲に称賛を」、ライゼ「主、よみがえる」、復活劇、舞踏歌の民謡「聖きキリストは」、コーラルとカンタータ「主は死の縄目に」の4曲は、11世紀から18世紀まで700年間、同一の旋律（「聖きキリストは」を除く）により、一貫したテーマを歌ってきました。それは、一つの命の死によって死に打ち勝った新しい命として、今、自分が生かされていることの喜びです。（石田友雄）

*去る6月26日に開かれた、バッハの森レクチャーコンサート「復活祭の音楽」には54名の方々が参加してくださいました。ハンドベルをステージの前に置いたこともあって、記念奏楽堂は満席になりました。このコンサートについて、6名の方が報告と感想を寄稿してくださいました。

復活祭の喜びを歌う

幅広い学びから知る隠された深い意味

春の訪れは誰にとっても嬉しいもの。暗く寒く閉ざされた時から、明るく暖かく、草木の芽生える時へ、つまり死の世界から生（復活）の世界へと移る、その喜びを歌ったルターのコラール：「キリストは死の縄目につき」“Christ lag in Todes Banden”が、バッハの森の「初夏のシーズン」（4月～6月）の学びの端緒であった。

バッハのカンタータ（BWV 4）は、この有名なコラールの歌詞と旋律を、そのまま全て使ったコラール・カンタータであるが、その由来が11世紀のミサの続唱：“Victimae paschali laudes”「過越の犠牲に称賛を」まで遡ることを「ワークショップ」で学んだ。その後、この続唱は会衆歌：“Christ ist erstanden”「キリストは復活された」に引き継がれ、更にルターがそれを改訂作詞したのだ。少しずつ変化しながら同一の歌詞と旋律が、キリスト教文化の中で脈々と引き継がれたことが分かる。

隔週金曜日に開かれる「オルガン音楽研究会」では、これらの宗教歌のオルガン編曲を学んだ。H. シヤイデマンの「過越の犠牲に称賛を」と、バッハの《オルガン小曲集》からBWV 625, 627である。「キリストは復活された」（BWV 627）は、コラールの3節に応じて、オルガン編曲も3節からなる一連の曲だが、第2節「もし彼がよみがえらなかつたら、この世は消え去っていたであろう」の箇所演奏が特に難しい。もしキリストが復活しなかつたら、キリスト教は成立しない。死は死のままであり、救いのない世界になる。この難しい仮定の世界を伝える歌詞に従って、バッハは難しい編曲をしたのだろう。バッハのコラール編曲の作曲意図を探るためには、歌詞が絶対に有効な材料である。

「キリストは死の縄目につき」（BWV 625）の楽譜を見ると#（シャープ）記号が目立つ。ドイツ語で#は「クロイツ」と呼び、「クロイツ」は「十字架」の意味でもある。そのため、このコラール編曲で#が多く音や音形に使用されている。コラール旋律冒頭の第2音の#は、第1音からの半音下降によって、キリストが死の世界に降った様子を示している。同様の半音下降の例を宮本とも子先生が指摘してください

た。このように、学ぶごとに気づかされることが多い研究会である。

合唱では、ワークショップで学んだことを基に4曲を学んだ。続唱「過越の犠牲に称賛を」“Victimae paschali laudes”では朗唱の歌い方を教わり、「ハレルヤ」を全員で楽しく繰り返し歌う「復活された、聖なるキリストは」“Erstanden ist der heilig Christ”では、復活劇の台詞部分をはっきり歌えるよう何度も練習した。カンタータ（BWV 4）第1曲「シンフォニア」は、鈴木由帆さんの解釈が感じられる興味深いオルガン演奏だった。続く第2曲（コラール第1節）の合唱では、始めは語るように、続いてハレルヤが降ってくるような喜びの表現を学ぶ。第8曲の4声コラールでは、ドイツ語の歌詞が鮮明になるように繰り返し練習した。今回は特に様々な歌い方があることを、指揮者の比留間恵さんから教えていただいた。また鈴木由帆さんが、合唱練習にいつもオルガン伴奏をしてくださったことに感謝している。

コンサートの最後に、「キリストは死の縄目につき」（BWV 625）を、宮本とも子先生のオルガン演奏に合わせて、コラール第1節をドイツ語で斉唱する試みをしたが、オルガンの明確な演奏により、内声とバスの動きや音が、コラールの歌詞と密接に結びついていることがはっきり分かった。この試みは今期の学びの総括になった。

今回は、ワークショップと研究会と合唱、それにレクチャーコンサートにより、古来愛唱されてきた一曲のコラールを、その由来からカンタータに至るまで、聖書、歌詞、旋律、オルガン編曲と、多角的に幅広く学ぶことができた。間違いなく私の知識と理解は、より立体的、重層的になった。

ドイツから遠く離れた日本の教会でも、復活祭には“Christ lag in Todes Banden”「キリストは死の縄目につき」が歌われている。このコラールを歌うたびに、今回の学びを思い出すであろう。今後のオルガン演奏の向上に繋げていきたいと思っている。

（安西文子）

命の糧があるコンサート

多くの学びと斉唱参加を楽しむ

バッハの森には、音楽好きの若い人たちが集まっていますが、僕は楽譜が読めないので、せめてドイツ語の歌詞は理解したいと思い、歌詞を予習して、毎週土曜日夕方の「J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ」に出席しています。レクチャーコンサート「復活祭の音楽」のプログラムには、カンタータ「キリストは死の縄目につき」（BWV 4）が取り上げられていました。そこ

で、過去の音楽鑑賞シリーズの資料を取り出してみたら、これまでに数回学んでいることが分かりました。このカンタータがコラール1節から7節の歌詞だけから構成されていることを確認し、YouTubeで何回も聴いて予習してから出席しました。

まず、このコラールがマルチン・ルターの作詞作曲だと思っていたところ、その起源は11世紀のヴィゴという宮廷詩人で、民衆に愛唱されてきたミサの続唱だったということを解説で学びました。

次に、美しく澄み切ったハンドベルの心地よい響きにひたった後で、12世紀から15世紀にかけてドイツ語圏で歌われていたコラール「主、よみがえる」を、石田先生の日本語訳で会衆一同で斉唱しました。その旋律が、ミサの続唱を継承し、ルターのコラールに引き継がれ、更に18世紀にバッハがカンタータに編曲し、実に700年間も歌い継がれてきたことを知りました。

続いて「復活された、聖なるキリストは」を、会衆とクワイアの斉唱の組み合わせで、1節から19節まで歌いました。僕は楽譜についていけないので、オルガンと近くの人たちの歌声に合わせて歌いました。各節ごとに会衆が「ハレルヤ、ハレルヤ」と歌うので、歌っているうちに、歌詞の物語の進行に共感して感情がぐっとこみ上げてきました。バッハの森のコンサートでは、参加者を聴衆と言わず会衆と呼んで、参加者全員、斉唱に参加して歌うことができます。これは大変嬉しい、楽しい経験です。

最後にバッハのカンタータ「キリストは死の縄目につき」(BWV 4)から、1節と7節をクワイアが合唱し、会衆が石田先生の日本語訳で全節斉唱しました。コラールの内容は、1節：キリストの死と復活、信徒の喜びを歌うコラールの概要。2節：私たちの罪のゆえに死に打ち勝つ者はいない。3節：神の子が来て罪を取り除き、死から支配権を奪う。4節：命と死が不思議な戦いを戦い、命が勝利を収める。5節：十字架の上で愛の火に焼かれた小羊の血によって死は無力になった。6節：喜べ、罪の夜は過ぎ去った。7節：「復活祭のパン」である主の御言葉を食べて健やかに生きよ。各節「ハレルヤ」で終わり、復活祭の物語が完成します。

バッハの森のコンサートには、大ホールでは味わえない楽しみと命の糧があります。(田中秀明)

涙溢れるオルガンの調べ

6月26日、ひたちなか市から、お友だちと3人でレクチャーコンサートに参加しました。私は思春期の頃よりクラシックに親しみ、レコードやCDを買い集めました。

特にバロック音楽には、自分の前世が中世ヨーロッパのルーツになるのではないかと思わせるほど心酔

しました。パイプオルガン、チェンバロなど、今でもとても好きです。バッハの森のパイプオルガンを目にしたのは、昨年(2015年)6月でした。何という長い年月を経ての巡り合いだったのでしょうか。お誘いくださったお友だちにとっても感謝しています。

石田先生の詳しいレクチャー、コーラスの方々の美しい声、そして全てを包み込む荘厳で重厚なオルガンの音色……。年に数回しか訪れることはかありませんが、素晴らしいオルガンの音に涙が溢れてしまうのです。今回も、素敵な演奏に、歌声に聴きほれてしまいました。本当にずっと残して欲しい大切な財産です。(橋本志津子)

癒やされる音楽と楽しいお茶

バッハの森のコンサートを訪れるのは、今度で3回目でした。音楽に余り知識がない私ですが、亡き両親が宗教音楽が好きで、特にバッハをよく聴いていたこともあり、教会のお友だちに誘われてコンサートに集わせていただきました。コンサートを通して両親を偲ぶ機会に感謝しています。

今回のコンサートは、学のない私にはレクチャーがやや難しかったです。宗教改革者ルターが、それまでに伝えられていた賛美歌を改訂作詞したという解説に興味を持ちました。ルターが、イエス・キリストの復活を伝えたかった強い気持ち、私にも伝わってきました。

バッハの森のコンサートに集うたびに、パイプオルガン、合唱、ハンドベルの美しい音色が心に沁みて癒やされます。そして、もう一つの楽しみが、コンサート終了後のお茶の時間です。プロ並みの手作りのケーキとお茶をいただきながら、一緒に集まったお友だちとお喋りするのとても楽しいことです。バッハの森のコンサートは、私の身も心も満たしてくれる素敵な時間です。(塩原美景)

心も体も満たされたコンサート

橋本さんと塩原さんの感想文を、ここに同封させていただきます。このお二人は、バッハの森のコンサートに誘うたびにいつも喜んでくださり、私は車に乗せていただくおかげで、バッハの森に行くことができて感謝しています。

今まで、バッハの森のコンサートは、始まるたびにハンドベルの点鐘が響き、これからどんな音楽が聴けるのかしらと胸がわくわくしてしまいましたが、今回は点鐘が聴けなかったのがちょっと残念でした。しかし、橋本さんと塩原さんがお書きになっておられますように、心も体も満たされた、素晴らしいコンサートでした。(岡本由紀子)

「バッハの森」とは何か

初めてバッハの森に接したのは、大学を卒業して茨城に職を得た年の秋ごろだったと思う。学生時代、古楽のサークルに籍を置き、機会があれば京都市内のいくつかのオルガンを聴き歩いて私は、茨城にそのような環境がまるでないのがっかりしていた。つくば市内のどこかで見かけたビラで、つくばにも良さそうな楽器があることを知り、そそくさと出かけて行ったのである。当時は奏楽堂に草刈オルガン(今は明治学院大学に移設されている)があり、会員によるリコーダーアンサンブルなどの活動もあった。また定期的にプロの演奏家によるコンサートが開催され、そういう音楽に飢えていた私は結構足繁く通った。もっとも一子先生は「また変な人が来ちゃったわ」と仰っていたそうだが。その後転勤でしばらく茨城を離れた私が帰任後再び通うようになったのは、一子先生から合唱へのお誘いを受けたからだ。歌なんぞやったことはなかったのだが、なぜか居着いて、もう20年位になる。バッハの森の何がそうさせたのだろうか？

バッハの森は何か、という問いの答えはひとに依って異なるだろう。問いを裏返して、「バッハの森は何でないか」と考えてみると、まず、(1)「音楽サークル」ではない。音楽学校でもない。(2) 宗教団体ではなく、まして「教会」でもない。(3) 「カルチャーセンター」でもない。が、「何かを学ぶ」ところであることは間違いない。何を学んでいるのかも、ひとそれぞれだろうが、自分の場合はおそらく、大げさな言い方を恥じずに言えば、「文化」を学んでいるのだと思う。他に言いようがない。

高校生の頃読んだ本に「仏像 ころとかたち」というのがあった。ある文化・文明を知るには、「ころ」と「かたち」をともに知らなくてはいけない、という趣旨で書かれた本である。「かたち」を学ぶのはやさしい。日本人は大昔から先進文明の「かたち」を必死に学んできたので、なおさらお手のものだ。そしてもちろん「かたち」を学ぶことはとても大事である。が、いっぽう、「ころ」を学ぶのは簡単ではない。そもそも文化の「ころ」とは何だろうか？

どのような文化も、生きた人間の営みの産物である。であれば、文化の「ころ」を知るということは畢竟、それを生み出したひとびとがどのように世界を見、どのように考え、どのように生きていたかを知ること、他なるまい。ひとが世界を見る仕方は、ほんの少しの

時間・空間が隔たっただけでもまるで変わるものだ。バッハの音楽の「ころ」を知ろうとするということは、すなわちバッハの時代の人びとが「生きていた世界」を知ろうとするということである。

バッハの森のひとつの特徴は、言葉をたいへん重視するということである。初めて来た人は、扱われる合唱曲の歌詞が何度も繰り返し丁寧に学ばれることに驚くだろう。(しかもドイツ語やラテン語の初等文法まで勉強させられる。) こういうことをしみじみやる合唱団はあまり無いのではないか。

思うに西洋文化、特にユダヤ・キリスト教系の文化は、その「ころ」を徹底的に言葉で表現する道を通ってきた。ユダヤ教もキリスト教も「正典」を編み、それをひたすら読むことに依って「ころ」を伝えてこようとした。また、紀元4世紀のいわゆる公会議で「信条」(クレド)を撰文する際、その語句の選定にあたってそれこそ命を賭けるような激しい議論がなされたことはよく知られている。教会の歴史のなかでは、このような言葉を重んじる伝統から離れようとした時代もあったが、いずれもそれを修正する動きが起こった。例えばルターによる「宗教改革」はその良い例である。

テキストを重視するというバッハの森のやり方は、そういった性質を持つ西洋の文化を学ぶためにとっても良い方法なのだ。(西洋古典学の方法を身につけた友雄先生にしてみれば、当たり前のことなのだろうけど。) そして、バッハそのひとでも自分の音楽の歌詞や関連する聖書の文言をとっても大切にすることは、カンタータの音楽を聴けば明らかだ。私にとってのバッハの森は、このような学びを可能とする場なのである。

しかし最後に付け加えると、文化の面白さは、言葉によって伝えられなかった事柄のなかにもある。私が昔から謎とすることのひとつは、ナザレのイエスが処刑された後、弟子たちになにが起こったのか、ということである。福音書、使徒行伝はそれを「復活」という言葉で表すが、ペテロ以下の弟子たちの「ころ」にどのような変成作用が生じたのか、それは推測するほかない。さる6月のレクチャーコンサートのなかで、友雄先生は、人類に決定的な影響を与えたこの事件に対する、ひとつの解を示された。それは強く私の印象に残るものであった。バッハの森の魅力は、またそのようなところにも存在しているのである。(深谷律雄)

2015 年度・統計

会員数 (2016.3.31 現在)

維持会員	90 人
賛助会員	37 人
計	127 人

入退会者数 (2015 年度)

	入会	退会	増減
維持会員	10	6	+4
賛助会員	0	4	-4
計			±0

集会回数

参加者延べ人数 (2015.4.1~2016.3.31)

学習コース	回数	延べ人数
クワイア (混声合唱)	33	551
バロック・アンサンブル	13	51
ハンドベル・クワイア	14	62
オルガン音楽研究会	15	124
コラール研究会	17	105
クラヴィコード・オルガン教室	12	41
オルガン・クラブ	15	41
読書会：聖書を読む	29	205
通奏低音研究	4	22
オルガン・クラヴィコード・チェンバロ練習	392	392
クリスマス祝会	1	21
小計	545	1615

公開プログラム

コラール・カンタータ研究		
コラールとカンタータ	30	382
メサイアを2倍楽しむ	3	52
コンサート	4	183
ワークショップ	3	157
家族ワークショップ	1	18
音楽会 (家族で楽しむ)	1	39
小計	42	831

運営活動

運営委員会	45	180
理事会	1	4
評議員会	1	8
有志懇談会	1	17
芝生・生け垣手入れ・大掃除	2	15
クリスマス飾り付け	1	6
オルガン・チェンバロ調律	4	4
打ち合わせ	2	13
小計	57	247

その他

特別音楽講習会 (フェリス)	1	7
リコーダー合宿	1	80
取材	4	4
来訪	6	10
小計	12	101

総計 656 回 2794 人

会計報告 (2015.4.1~2016.3.31)

経常収支 収入の部

単位：千円

基本財産受取利息	1
特定財産受取利息	0
年会費 (維持・賛助会費)	787
事業収益	
1) 研究会 (学習コース)	1,741
2) 公開講座	203
3) コンサート	278
4) ワークショップ	248
5) 音楽教室	116
6) 楽器使用料	199
7) 賃料収益 (家賃収入)	1,202
一般寄付金	400
雑収益 (管理棟家賃、コピー代など)	894
計	6,069

支出の部

給与手当	924
支払報酬 (会計事務所)	165
旅費交通費	281
通信運搬費 (郵送料、電話、ネット関係)	282
什器備品費	6
消耗品費 (コピー用紙、文具他)	75
修繕費 (聖書の国塗装補助、調律、植栽)	1,596
印刷製本費 (バッハの森通信、封筒印刷)	102
光熱水料費	667
賃借費 (地代、機器リース料)	1,145
火災保険料	123
諸謝金	936
租税公課 (固定資産税、法人事業税)	375
負担金 (振込手数料)	3
広告費	0
雑費 (コピー使用料、クリーニング代)	88
計	6,768
当期経常増減額	-699

指定寄付収支

単位：千円

収入の部	支出の部
土地地上権積立	
前期繰越	939
寄付	43
計	982
	繰越
	982

建物維持・修理

前期繰越	933	建物修理	2,092
寄付	473	(聖書の国、デッキ)	
一般会計より	921	繰越	235
計	2,327		2,327

オルガン修復

前期繰越	792		
寄付	24	繰越	816
計	816		816

借入金 (2016.3.31 現在)

単位：千円

長期借入金 (土地購入、塗装、構築物)	34,000
短期借入金 (塗装、修理)	3,540
短期借入金 (新法人移行他)	1,700
計	39,240

問題点と今後の課題 2015 年度決算報告

今回の 2015 年度決算報告では、「経常収支」は約 70 万円の赤字になりました。これ以上引き締められないほど経費を節約し、人件費のほとんどをボランティアに頼ることによって、通常の収支は何とかやりくりしている状態ですが、財団法人の基礎となっている土地・建物・オルガンを維持するための基金は常に不足しています。これを一般会計から補ったための赤字が上記の数字です。

地上権の更新と建物修繕は皆さんの寄付と、それでも不足した場合は、石田友雄・理事長からの借入金でまかなっているのが現状です。借入金の累計は 3900 万円以上になりました。

この状態で、ここまで建物の塗装とオルガン修繕等を行ってきましたが、2024 年と 2026 年に支払わなければならない地上権更新に必要な 244 万円の積立には、現在 145 万円が不足しています。また、建物の塗装についても、来年度に予定しているコミュニティセンターの塗装費 200 万円とそれ以降に必要な資金の目処が立っていません。このままでは、早晩建物の塗装と修繕は諦めざるを得ない状況になってしまいます。

バッハの森でも自助努力として、会員である音楽家が主催するコンサートに場所を貸したり、今年も家族で参加できるような気軽なコンサートも計画しています。なかなかニーズを把握するのが難しく、会員や参加者の増加につながらないのが悩みですが、今後もバッハの森らしさを維持しつつ、ユニークな試みと、地道な努力を続けていくことが問題の解決に向かう道だと思っています。(戸部慶子)

第 5 回有志懇談会

6 月 25 日に開かれた 5 回目の「バッハの森の運営を考える有志懇談会」には、17 名の参加者があり、バッハの森の現状及び、事業報告が行われました。続いて、会計報告をもとにした経済状況の説明とそれに対する質疑応答がありました。経済的な面では、より一層経費削減をはかるための方策として、「バッハの森通信」、お知らせ等のメール配信案が出たほか、収益事業を増やすための貸し会場、会員や参加者を増やすための宣伝方法の改善、特にホームページの充実や、参加費の安いコンサートが開けないかどうかということについても意見が出されました。(戸部慶子)

LETTER／レター／便り

ハンドベルを楽しむ 活動をしています

石田友雄先生、皆様

「バッハの森の運営を考える有志懇談会」とレクチャーコンサート「復活祭の音楽」に出席できず、すみませんでした。

今日は嬉しい電話があったのでお知らせします。私たち、ドリームベルズ of NAGANO は、私が勤務していた長野市立南部小学校の PTA 活動を母体として、今年で 20 年になります。10 年前に長野県文化ホールのロビコンで、10 周年記念コンサートを開きました。その時の私たちのハンドベル演奏を覚えてくださった方から、電話をいただいたのです。

「自分たちも小学校の PTA 活動としてミュージックベルを楽しんできたけれど、あの時の音が忘れられず、イングリッシュ・ハンドベルを振ってみたくなった。10 年間温めてきた気持ちをお伝えする」ということでした。お話し合いから、そちらのグループに私たちのハンドベルをお貸ししたり、交流演奏会をしたりできそうで、私たちの活動が広がりそうです。多くの皆さんにハンドベルの音や演奏の楽しみを知っていただきたいと思って開いたコンサートでしたので、このような方がいてくださったことは本当に嬉しいことでした。

25 年前にバッハの森でハンドベルの手ほどきをしていただいた者として、故・一子先生と友雄先生、バッハの森の皆様、に、恩返しが少しできたかな、という気持ちです。これからも、ご指導、よろしく願い申しあげます。正村寿満子(長野市)

4. 7, 14, 21 **運営委員会** 参加者各 4 名。
 4. 8～6.26 **初夏のシーズン**
 4.14 **打ち合わせ** 杉田せつ子・ヴァイオリン・リサイタル準備。岩瀬雅代氏、戸川明子氏。
 4.29 **杉田せつ子・無伴奏バロック・ヴァイオリン・リサイタル** 参加者 80 名。
 4.30～5. 1 **教会音楽ワークショップ** 「復活祭のコーラルとカンタータ」出席者：セミナー（3 回）57 名、合唱（2 回）40 名、オルガンとコーラル（1 回）15 名。
 5.12, 19, 26 **運営委員会** 参加者各 4 名。
 5.16～13（土日を除く）**奏楽堂外壁塗装**（ニットウ工業）。
 5.19 **決算事務** 大庭良子氏（TOMA コンサルタンツ）。
 6. 2, 9, 16, 23, 30 **運営委員会** 参加者各 4 名。
 6. 8, 15, 16 **植栽整理**（鈴木造園）
 6. 25 **バッハの森の運営を考える有志懇談会** 参加者 17 名。
 一般財団法人バッハの森評議員会 参加者 7 名。
 一般財団法人バッハの森理事会 参加者 5 名。
 ゲネプロ 参加者 24 名。
 オルガン調律 河内克彦氏。
 6. 26 **レクチャーコンサート**「復活祭の音楽」参加者 54 名。
 6.27～9. 9 **夏期休館**

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コーラル・カンタータ研究

コーラルとカンタータ (JSB)

4. 9 復活祭第 2 祝日のカンタータ「喜び、お前たち諸々の心よ」(BWV 66)；コーラル「主よみがえる、死の責め苦より」。オルガン：J. S. バッハ「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ、そのことに私たちは皆喜ぼう」(BWV 66/6)、海東俊恵。参加者 14 名。
 4.16 第 402 回、オルガン：J. S. バッハ「キリストはよみがえられた」(BWV 627)、海東俊恵。参加者 11 名。
 4.23 ユピラーテのカンタータ「お前たちは泣きうめくだろう」(BWV 103)；コーラル「憐れみ深き主」。オルガン：J. S. バッハ「私は一時お前を見捨てた」(BWV 103/6)、當眞容子。参加者 10 名。
 5. 7 第 403 回、オルガン：J. G. ヴァルター「私の神がのぞまれること、それが常に起こるように」、當眞容子。参加者 10 名。
 5.14 昇天祭のカンタータ「信じて洗礼を受ける者は」(BWV 37)；コーラル「主よ、われ感謝す」。オルガン：J. S. バッハ「信仰を私に授けてください」(BWV 37/6)、笠間きよ子。参加者 11 名。
 5.21 第 404 回、オルガン：S. シャイト「私はあなたに感謝いたします、愛する主よ」、笠間きよ子。参加者 15 名。
 5. 28 聖霊降臨祭第 1 祝日のカンタータ「私を愛す者、彼は私の言葉を守るであろう」(BWV 59)；コーラル「聖霊の主、来たれ」。オルガン：J. S. バッハ「来てください、聖霊よ、主なる神よ」(BWV 59/3)、安西文子。参加者 13 名。
 6. 4 第 405 回、オルガン：F. W. ツェハハウ「来てください、聖霊よ、主なる神よ」、安西文子。参加者 11 名。
 6.11 三位一体祭のカンタータ「反抗的で臆すものだ」(BWV 176)；コーラル「すべての世の知恵」。オルガン：J. S. バッハ「願わくは私たちが直ちに」(BWV 176/6)、金谷尚美。参加者 10 名。
 6.18 第 406 回、オルガン：J. S. バッハ「私たちの主、キリストはヨルダン川へ来られた」(BWV 684)、金谷尚美。参加者 18 名。

学習コース

- バッハの森・クワイア（混声合唱）** 4.9/19 名、4.16/18 名、4.23/20 名、5.7/13 名、5.14/18 名、5.21/17 名、5.28/18 名、6.4/15 名、6.11/21 名、6.18/20 名。
バッハの森・バロック・アンサンブル 4.9/4 名、2.13/4 名、5.21/4 名、6.18/5 名。
バッハの森・ハンドベル・クワイア 4.23/4 名、5.14/4 名、6.11/4 名、6.18/4 名。
オルガン音楽研究会 4.22/7 名、5.13/7 名、5.27/7 名、6.10/9 名、6.24/7 名。
コーラル研究会 4.8/5 名、4.22/6 名、5.13/6 名、5.27/5 名、6.10/8 名。
クラヴィコード・オルガン教室 4.22/3 名、5.13/2 名、6.10/2 名、6.24/3 名。
オルガン・クラブ 4.15/3 名、5.6/2 名、5.20/3 名、6.3/3 名、6.17/2 名。
読書会：聖書 4.9/9 名、4.16/7 名、4.23/8 名、5.7/8 名、5.21/9 名、5.28/7 名、6.4/7 名、6.11/9 名、6.18/7 名。
オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習 4.5/3 名、4.6/2 名、4.7/1 名、4.8/2 名、4.9/2 名、4.12/3 名、4.13/1 名、4.14/2 名、4.15/3 名、4.16/2 名、4.19/1 名、4.20/3 名、4.21/2 名、4.22/2 名、4.23/2 名、4.26/1 名、4.27/1 名、4.28/3 名、5.6/2 名、5.7/2 名、5.10/2 名、5.11/1 名、5.12/1 名、5.13/1 名、5.14/3 名、5.17/2 名、5.18/2 名、5.19/1 名、5.20/2 名、5.21/2 名、5.24/1 名、5.25/1 名、5.26/2 名、5.28/2 名、6.1/2 名、6.3/3 名、6.4/2 名、6.7/1 名、6.8/1 名、6.9/1 名、6.10/1 名、6.11/2 名、6.14/2 名、6.15/2 名、6.16/2 名、6.17/3 名、6.18/2 名、6.21/2 名、6.22/2 名、6.23/2 名、6.24/2 名、6.25/2 名、6.28/2 名、6.29/1 名、6.30/1 名。